

2022 年度イスラーム信頼学科研全体集会 参加報告

「あいだ」が持つ可能性—緩やかなつながりの生まれる場に共にいて」

東京大学大学院教育学研究科博士課程

杉森 美和子

2022 年度イスラーム信頼学全体集会「対立と紛争のなかで、つなぐ」では、パレスチナ、ドイツ、新疆ウイグル自治区、第一次世界大戦期のシリア、欧米諸国に着目し、紛争と対立の中で、各々がどのようなコネクティビティを生成しているのかが考察された。「紛争下での信頼と猜疑:パレスチナ人と「他者」が織り成す関係性」では、「賭け」としての信頼と信頼の裏返しとしての失望の存在が示された。回顧録には失望や猜疑の記述と共に「他者への期待」が記載されているが、そこには柔軟な「他者」との関係性があり、敵の中に「良い個人」を見出す試みもなされていた。「ドイツのムスリムとユダヤ人との関係性からみる移民問題の現状」では、従来着目されてきたドイツ人と主にトルコ系移民からなるムスリムの関係性だけではなく、ドイツ在住のユダヤ人とトルコ系ムスリムの関係性をも併せて理解する必要性が述べられた。ドイツ社会ではユダヤ人とムスリムはマイノリティであるが、両者はマイノリティに対するスティグマや不利益に対して全面的に共闘しているとはいえない。部分的な協調関係が見られる一方でドイツ国外での関係性に関しては対立と相互不信が生じていることが示された。「新疆ウイグル自治区における信頼あるいは団結の問題:民族幹部の形成と変容」では、中国共産党と新疆ウイグル自治区をつなぐ民族幹部に着目し、民族幹部は必ずしも現地の要望を党に伝える仲介者として機能する訳ではないことを党と現地の双方が認識する中で関係性が構築されていることが示された。「第一次世界大戦期のレバノン・シリア移民と中東地域の再編」では、レバノン・シリア地域出身の移民の中でもマンチェスターで繊維貿易を展開していたマンチェスター・シリア人協会の人々の戦時の遠隔地ナショナリズムと移民のつなぐ力が着目された。そこには多様な人々と街で出会い、つながることで生まれる多方面の近くて遠いコネクティビティと、移動を経た重層的な絡みとしての人間関係の広がり存在していたことが示された。発表をふまえた全体討論では、「あいだ」の対照として「かべ」が提示され、「かべ」が見なくてよいものを隠す分断や境界を意味するのに対し、「あいだ」はそれ自体が場所を示すとともに関係性、つながり事態をもカバーしているという指摘がなされた。そのうえで、曖昧さや判らなさに耐える能力としてネガティブ・ケイパビリティの概念が紹介されるとともに、グローバル化によって心の「かべ」が先鋭化する事態もあるため、その状況をどう取り扱うかについても話題となった。4つの発表と全体討論を通じて、全ての研究には「あいだ」が存在しているが、その「あいだ」をどのように認識するかは人によって異なり、「あいだ」には常に揺らぎが生じているという新たな視点を得ることが出来た。全体討論の後には、現地発表18件オンライン1件からなる合計19件のポスターセッションと企画展「学知の共創を考える」のコアタイムが設けられたが、多様な地域、時代、テーマが一堂に会し、発表に関する率直な疑問はもちろんのこと、「どうしてこの研究テーマを選んだのか」や今後の研究ビジョン等についても語り合われている光景は、語り手と聞き手の間に緩やかなつながりが生まれ、少しずつ寄

り添いがなされていく場が生まれ、機能している姿のように思われた。そして信頼とは、自分と他者の視点や認識の差異に目を向けるだけでなく、差異が生まれた背景にある歴史や意識に寄り添うこと、結論を急がず、けれども決して諦念に飲まれない歩みの積み重ねにより生じていくと感じた。